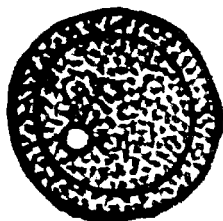
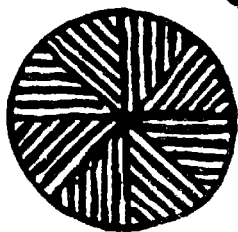
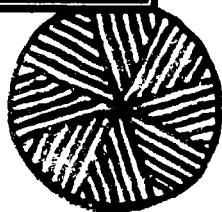


三

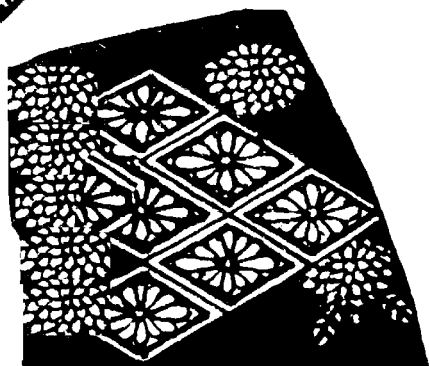
婆女

有吉佐和子

新潮社



有吉佐和子



新装版 三 婆 さん ばば

昭和四十九年三月十五日発行
昭和四十九年九月十日六刷

定価七〇〇円

著者 有吉佐和子 ありよし さわこ

発行者 佐藤亮一

発行所 新潮社

〒162 東京都新宿区矢来町七一 振替東京八〇八
電話業務部 03(266)五一一一 編集部(266)五四一一

印刷 二光印刷株式会社
製本 大口製本株式会社

© Sawako Ariyoshi, 1974, Printed in Japan.

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

目次

水と宝石

5

王臺

49

なま酔い

127

黒衣

175

三婆

223

装
幀
安
野
光
雅

三 婆

水と宝石

遠山次郎の寝ていたベッドに、今は耀子が寝ている。その部屋は日本間の勘定で云えば六畳ほどの広さで、ベッド以外のファネチャは全部はめこみになっていた。洋服ダンスも本棚も、それから机までが、壁の中のスライディング・ドアを開ければ現れる仕掛である。閉めれば部屋の中にはたった一つ、シングルベッドが残るだけなのだ。壁紙は淡いブルーの地に鮮かな緑色で菌朶の模様が細かく、ドアには上品な青一色がむらなく塗られている。窓のカーテンは青磁がかったグリーンで、その向うから早朝の薄明が忍び込むと、部屋の空気は碧く染って海底のように見える。

ベッドの上では耀子がしどけなく眠っていた。真紅の色をした袖無しのネグリジェが、青い部屋の中で黝くろみもせずに燃えて、耀子の首から下を包んでいた。肉のしまった浅黒い腕が長く伸びて、一方はシーツの上に投げ出され、もう片方は二の腕を上げて肘から先は乱れ髪に隠れている。まだ真夏の装いにはならないので始末をしていない黒い腋毛が、プリーチした縋い髪と対照的で、何か可笑しかった。

可笑しい、と云えば、それは耀子の寝顔にも云えたかもしれない。目が覚めれば大人びた口をきき、彼女の年齢の三倍も年老いている伯母の政代と対等で話をする耀子だったが、唇をほんやり開けて、眠っているところを見れば、まだまだ幼くてあどけなかった。ブラジャーで形をつければ大きくて成熟したように思える乳房も、仰臥しているときには胸の上で流れてしまうのか、真紅のネグリジェもそれほど悩ましくは見えない。

まだまだ子供なのだ。

政代は口の中で呟いて、そっとドアを閉めると、これは隣の倍以上もある広い自分の部屋の中で、耀子の部屋との境の壁寄りにあるソファに、ゆったりと腰を下した。葡萄色のガウンが、紫色に部分染めした白髪との調和を見せて、寝起きの彼女は充分美しかった。サイドテーブルの上にある小型の置時計を見ると、通いのメイドが来るまでにまだ一時間以上の時間がある。

眼が覚めるとベッドから転げ落ちるように抜け出て、洗顔し、髪をブラッシングするという朝の日課の後、余った時間は必ずソファの上で、ゆったりと過すのが政代の習慣だった。そのままの姿勢で、彼女の眼はじっとソファの背後に並んでいる青い水槽に注がれる。

耀子の寝室とは正反対で、政代の部屋には実にとある家具や置物が雑然と並べたてられていた。まず第一に目を奪うものには、ルイ王朝の貴婦人の寝室にふさわしい豪華なダブルベッドがある。堇色のパイルに、真珠母をスパンコールのように繡いつけた絢爛たるベッドカバー。濃

い紫色のソファには色とりどりのクッションが置かれている。花模様を描いた格天井から下ったシャンデリアが、電気を消されて所在なげな白っぽい表情をしている。その真下には、丸い樺色のカーペットが敷かれ、キッチンとの境には分厚い絨緞がベルシャ模様を織り出している。まあ明治時代なら横浜あたりで洋妾の住居にこんな図が見られたかもしれない。やたらにバタ臭い調度、我物顔でのさばり、互に牽制しあつて喚き立てるのだけは抑えている——といった、ある種の重苦しさがそこにはあつた。

この部屋の中で、初夏の季節に相応しいものといえば、バルコニーから流れ込んだ朝の空気と、政代がさっきから注視している熱帯魚の水槽だけだ。ステンレスの枠付きの硝子の容器は、政代が注文して特に作らせたもので、六つとも全部同じ大きさで、水族館の水槽と同じような表情で並んでいる。エアポンプもサーモスタット（恒温器）も完備しているし、一週に一度は「先生」が魚の工合を見に来るので、政代自身がすることといえば餌の世話だけだったが、魚は現金なものでそれだけでも充分彼女になついていた。分厚い硬質硝子越しに、此方を向いて、まるで朝の挨拶をするように口をすりつけてくる。

お早う、次郎ちゃん。

政代は人さし指の先で、トントンとその魚たちに挨拶を返してやる。魚は眼をだるそうに半眼に閉じたり開けたりしながら、口は硝子に吸いついたまま離れない。同じように小さな魚が何匹

も寄ってそうしている。

どうしたの、次郎ちゃん。元氣のないことねえ。

痩せっぽちのグッピーは、丸い眼が黒くて体と不相応に大きくクリクリしている。その様子が遠山次郎にそっくりなので、政代は彼を懐しんで熱帯魚を飼い始めたようなものであった。熱帯魚の飼育は、初歩にはグッピーが定式で、政代はすぐに飼い馴れて間もなくエンゼルフィッシュからネオンテトラまで進級したのだが、その間にグッピーは怖い早さで繁殖した。時々「先生」が喜んで貰って帰るので、どうにか交通整理はできているのだが、今でも約二十匹ばかりが、チョロチョロと水の中を走りまわっている。小さい体つきに似つかわしく、落着きのない泳ぎ方である。

ジロチャンですって、柄だわね、ピツタリ。

耀子が感心したことがあったが、彼女は名前の語呂で感じが出ていると思ったまでだ。グッピーの次郎ちゃんが遠山次郎のことで、彼がつい一年ほど前まで伯母と同棲していた青年だとは夢にも知らない。

硝子に吸いついて政代の指に甘えていたグッピーは、間もなくジュエル・フィッシュの雄に追いつかれて、ピピピと尾を振りながら彼方へ逃げて行ってしまった。赤茶色の体にエメラルドのような斑点を散りばめているジュエルは、発情すると地肌が一際赤く燃えて美しくなる。端麗な横顔の中で、眼だけがひどく強欲に見え、それは政代の最初の夫によく似ていた。

篠木東造というのが彼の名である。骨董屋では老舗の当主だったが、宝石の眼ききが達者なところから、その方で相当にあくどい商売をしていた。李朝の磁器から茶道具などを主に扱っていて、宮家や華族の茶会に出入りしたりしていたのに、大正末期のモダン趣味に溺れて娘のように若い妻には洋装を強い、好んで外国人との交際をさせた。家は洋館に棲み、やたらと外国の調度を並べたてた。若かった政代はそんな夫に反撥を感じることはあっても、精力的な東造に押しまぐられた感じで何一つ抵抗することはできなかった。

東造が脳溢血で倒れ、六年というものの半身不随で寝たきりになった間、政代は夫に代って店に出て商いをしたが、古い陶器や磁器の類にはどう勉強しても鑑賞力は及びつかなかった。そのかわり、宝石にかけては東造より才能があつたようだ。当主が倒れても店が傾かなかったのは、政代が店を宝石商として再出発させたからである。まだ若い政代が、ひたすら宝石を買い集めたり、売りさばいたりという生活に明け暮れているのは、彼女が美しいだけに一層人々の視線を集めた。老いた夫が中風で寝たきりでいると知って同情するもの、貞女とみて感嘆するもの、あるいは暗に彼女の氣を惹く蕩児など、取巻く眼は様々だったが、政代は商売一途に生きて視線を散らさなかった。

しかし世間は知らないけれども、政代は貞女ではなかった。生前、夫を裏切ったことはなかったが、夫が政代を妻とする前から花柳界に馴染みの女があり、子供まで生ませていたことを知っ

ていたからである。東造が倒れて以来、政代の知らなかった親類が急に足繁く訪れて来るようになった。明らかに東造の遺産を狙うものであり、若い妻が失策せぬかと政代の行状を睨めまわしていた。

東造が死ぬ日まで政代が品行方正に過すことが出来たのは、案外こうした周囲の眼があつてのことだったかもしれない。その証拠と云つては可笑しいが、三十歳で未亡人になった政代は店が自分の名儀に改まると同時に、堰を切ったように遊び始めた。

ダンディな洋行帰りの森下男爵との、派手な恋愛沙汰はその手初めであつた。

熱帯魚を飼い始めた初期に、パールグラミを買ったとき、政代は森下を思い出したものだ。青みがかつた肌に白く光る斑点が無数に散らばり、口から尾にかけて目玉を横ぎって走る黒い直線が、体全体を瀟洒に引締めている。鰓えらの下にオレンジ色の細長いヒゲが二本のびているのは、お酒落な森下そのものだった。繊細で、上品で、穏かな外見を持ちながら、交尾動作は濃厚で、これが魚かと思うような官能的な姿態を示す。背鰭の長くなつた雄は発情すると胸部が鮮かなオレンジ色に色づき、水面に浮んでは盛んに空気を吸い込んで泡を作り始める。パールグラミは闘魚科に属していてラビリンス（副呼吸器）を持っているので、直接空気を呼吸することができるのだ。

昨日の午後、熱帯魚の先生はパールグラミの様子を観察して、

これは、明日の朝あたり産卵しますよ、奥さん。

と云つて歸つたが、政代の方が彼より先にそれは見越していた。それでなくても、年と共に睡眠量の減つてしまつた政代は、夜明けと同時に眼ざめる毎日で、晩方の薄明の中で行われる熱帯魚の交尾は、すっかり見馴れていたのだ。それはしかし見飽きるということではない。彼女は今朝は久々で胸をときめかして待つてゐるのだった。

森下男爵に似たパールグラミは、一番だけ飼われていた。雄のダンディなのに較べて雌は体も小さくて著しく見劣りがした。発情した雄の体色が俄かに美しくなつてゐるのに、雌は冷静に色を変えず、彼女に近寄つてくる雄が鰭と鰓ぶたを掀げて媚態を示しても、すいと体をかわして尾鰭をピクリとも動かさない。浅緑のヴァスネリアの根元に潜んで、無表情な顔をしている。また追う、また逃げる。仲々反応を示さない雌に、次第に雄は焦れ始めた。猛つて、口の先で雌の体をつつき廻す。逃げ廻る雌は、次第に逃げる喜びにむせ始めた。懼れたように、しかし雄の心情を熟知したように、雌はやがて美しい雄に寄りそつて抱擁を待ち望むのだ。

水面に固つてゐる泡の下で、二匹のパールグラミは姿態をくねらせて互に愛を謳い始める。やがて雄は自分の頭と尾をぐいと反らせて体を二つに折り、雌を間に挟んで抱きしめる。腹の白い斑点が妖しく燦めいた。雌はうつとりと雄に体を包まれたまま幽かに唇を開けている。と、雄と雌が同時に電流を通じたようにビリビリと全身を震わせ始めた。卵と精子が水の中に放出され

る。

交尾が終つても、二匹のパールグラミは暫く体を離さなかつた。雄の体は伸びて雌を解放していたが、どちらもそのまま水の中で動かなかつた。腹鰭だけが柔かく水を搔いて、背も尾も静止したまま、鰓蓋も大きな動きを見せない。まるで放心しているのであつた。

一回の交尾で二十個近い卵が産み出されるが、それは殆ど眼に見えぬほど小さなものであつた。ほんやりと見ている限りでは、それは産卵という種族保存のための嚴肅な営みではなくて、雄と雌との本能的な戯態としてしか見えなかつた。交尾後、二、三秒は放心していたパールグラミは、やがて我に返ると水中に散らばつた卵を口先でまとめて水面に浮んだ泡につける。それが終ると、二匹はまたもつれあつて、美しい雄と小さい雌は喜びに体を幾度も痙攣させるのだつた。激しいときには十数回これを繰返して飽きない。まるで疲れを知らぬように、離れては抱き、抱かれ、水の中で、華やかに繁つた水草の間を縫つて悶え続けるのだつた。

世間の派手な取沙汰の中で、森下との交情に酔い痴れていた三年間を痺れるように回顧しながら、政代はパールグラミの様々な姿態を見詰めて飽きなかつた。しかし記憶の糸を手繰つても、かつての日に燃えた胸のときめきまでは戻らなかつた。熱帯魚が摂氏二十五度の水中にいるように、政代の体に流れる血液も沸立たなくなつてから久しいのだった。

お早うございます。

メイドの声で、政代は我に返った。

あ、お早う。

鷹揚に応えて、中年女の大きな臀部がキッチンへ消えるのを見てから、政代は立上った。今の時代では目に立たないが、かなりの長身である。肩も腰も肉つきが適宜で、彼女の後姿にも彼女の年齢は見えなかった。通いで来るメイドが、政代の口から彼女より二十も歳上だと聞かされたとき、冗談をと笑って未だに本氣にしていない。不幸な結婚をして、子供を産んで育てるだけに明け暮れ、その子供に病まれて家政婦務めをしている彼女からは、政代の豪華な生活の総ては不可解というものだったのだろう。

熱帯魚の交尾を見てから鏡台の前に腰を下した政代は、数々の化粧瓶の中からホルモンクリームを取上げて顔にのばすと、丁寧にマッサージをし始めた。娘の頃には白すぎるほど白かった肌は、森下男爵の想い者であった頃には女盛りの薔薇色に輝き、やがてまた一層美しく白磁のように引締っていた。手入れが行届いて今も汚点一つできていない。紀州でとれる内紫うちむらさきという大きなネーブルのような果実の表皮は、やや黄味を帯びて肌理こまかく、今の政代の肌に似ているそうだ。艶めいたところまでがそっくりだと、そう云って愛撫した男の面影も、やはり水槽の熱帯魚になって、化粧を終えたあと彼女の手から餌を与えられるのを待っている。ギアナ産のエンゼルフィッシュがそれだ。